



Title	<文献紹介>「承認」の政治的地位とは：A. ホネットとJ. バトラーの論争を手掛かりとして
Author(s)	濱本, 涼介
Citation	メタフュシカ. 2024, 55, p. 109-114
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100362">https://doi.org/10.18910/100362</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 《文献紹介》

### 「承認」の政治的地位とは

#### —— A. ホネットと J. バトラーの論争を手掛かりとして ——

## 濱本涼介

### はじめに

本稿では、『承認と両価性』（Ikäheimo et al. [2021]）に収録されている、アクセル・ホネットとジュディス・バトラーとの間の論争を扱うことで、バトラーの理論における承認概念の理論的地位を明らかにすることを目標とする。この論文集では、最初にホネットとバトラーの間で2往復の議論のやり取りが行われた後、その内容について他の論者たちがコメントを行う、という体裁となっている。バトラーの承認理解はこれまでの著作のなかでたびたび言及されているが、承認の理論的地位を主題とした論争という舞台設定のためか、この論文の中でかつてないほど明瞭な形で記述されている。

編者がホネットとバトラーの両者をそれぞれ「承認に関するより楽観的な主張者とより悲観的な主張者」（*ibid.*, 9）として対照的に特徴づけるように、両者は二往復の論文のやり取りで様々なトピックについて激しい議論を行っている。紙幅の都合上、今回はその全てに触れることはできないが、主要な二つのトピック——承認概念の理解と、承認が政治理論において持つ地位——についてのバトラーの見解を整理することを目標とする。

### 1. 承認概念の理解——ホネットからバトラーへ

両者のやりとりは、ホネットによるバトラーのヘーゲル承認論理解への指摘から始まる。すなわちバトラーの著作には「承認の認知的側面と規範的側面の混同」（Honneth [2021a], 26）が見られるのであり、そしてそのことがヘーゲル承認論から現代において引き出しうる理論的価値——すなわち、「私たちに態度を変えるよう強いるような、道徳的な重要性を持つ性質を人に帰属させる可能性」（*ibid.*, 28-29）——を見落とすことにつながるというのである。

この批判を理解するために、ホネットのヘーゲル理解を参照しよう。ホネットは、ヘーゲルが承認概念を用いるときはいつも、「非常に特殊な意味での二項的な関係を念頭に置いている」

(*ibid.*, 24) ことに注意を促す。承認というかたちで規範的地位を他者に与えることは同時に、承認の与え手に「自分自身の自由を制限すること」(*ibid.*)を前提とする。なぜなら、規範的地位が他者に対して帰属される場合、それは「規範的地位の与え手が、以前のように自由で無制約的な方法で行為することを自分自身に禁じること […] に依存している」(*ibid.*)からである。そしてこの無制約的な自由の放棄ゆえに、「他者にある規範的地位を与えることは、そのような承認の受け手と与え手の双方に規範的効果をもたらす」(*ibid.*)といえるのであり、承認の受け手と与え手の双方は承認の直中で変容していくことになるのである。ホネットが着目するのはこのような、承認者と被承認者が互いに動的に変容していく過程にはかならない。それゆえ、ヘーゲル的な承認と呼ぶことのできる唯一のものは「そのような帰属の主体に自らの行為の無制約性を放棄させることによって、他者に対して規範的態度を変える——つまり、[…] 彼女に帰属する性質や特性の観点から他者を評価する——ことを瞬時に強制するような、地位や権威を他者に与えるもの」<sup>1</sup> (*ibid.*, 25) である。

このような承認概念の理解のもと、ホネットはバトラーの著作に見られる「承認」という語の混乱を批判する。すなわち、「社会的言説において同定カテゴリー [identifying categories] を公的に使用することによる、社会的アイデンティティの制度的な帰属」(Honneth [2021b], 58)と「「承認者」に自らの自由の空間を制限することを要求するような、規範的権威の承認による授与」(*ibid.*)という二つの異なる事態が、同じ「承認」という語で語られていることが問題なのである。先述のように、ホネットが再定式化したヘーゲルの承認概念においては、承認者と被承認者が互いに変容していくような、特殊な二項関係が想定されていたのであった。しかしバトラーは、このような二項関係に当てはまらない前者をも「承認」と呼ぶために、本来ヘーゲルが想定していないものまで「承認」という語でラベリングすることで、その結果ヘーゲル承認概念の現代的意義を損なってしまっているのである。なぜ前者の事態がヘーゲルが想定していた二項関係に当てはまらないかといえば、アイデンティティの制度的な帰属においては、承認のプロセスを通じて被承認者は承認者によって何らかの特徴を与えられるが、承認者は自己の自由が制限されることはないからである。すなわちここでは、被承認者の変容は見られるが、承認者は何らかの特性を他者に帰属させるだけで、変容しない。したがって、こうしたものをヘーゲル的な意味で承認と呼ぶのは見当違いである。そればかりか、単なる帰属と承認をこのように混同することで、「私たちがしかじかの者として分類される「承認」が、私たちに何らかの規範的権威を与えるのではなく、多くの場合（ジェンダー、肌の色）において、その場にある規範を共に決定する正統な機

<sup>1</sup> ホネットは以下の例を挙げている。「誰かを「市民」や「友人」と呼ぶことと、その同じ人をたとえば「サッカーファン」や「ピアノ演奏者」と呼ぶこととは、違いがある。後者では、私たちにある種の振る舞いを求めるような道徳的な意味が含意されない。呼びかけの二つの形式のうち最初のものを承認と呼ぶことで、[…] 特性の帰属が、我々が従わなければならないような規範的地位を他者に与えるという道徳的な含意を持つことを確認しよう。」(Honneth [2021a], 29)

会を全て奪う」(*ibid.*, 57) というような承認概念についての誤った定式化<sup>2</sup>を受け入れることになってしまい、結果的にヘーゲルの承認概念のポテンシャルティを損なうのである。これが、ホネットのバトラーに対する診断である。

このような帰結を多くの場合でもたらずアイデンティティの認知的帰属とは対照的に、後者の事態——被承認者に規範的地位を付与し、翻って承認者に自らの自由を制限することを課するような承認が行われる場合——においては、承認によって、社会的な自由を個人が行使用することが可能になるのである。ホネットにとって、ヘーゲルの承認概念が現代に拓く可能性というのはまさにこのことであり、それゆえにホネットはバトラーが前者を「承認」という語で呼ぶことに反対するのである。ホネットにとって、承認は自由を可能にするものであり、自由を不可能にするものではない。

以上がホネットによるバトラー批判の要諦である。本節では、バトラーに対する批判のうち、ヘーゲルの承認概念の理解、およびその理論的扱いについて取り上げた。次節ではこの2点についてのバトラーの応答を再構成することを試みる。

## 2. 承認の理論的地位——バトラーからホネットへ

### 2.1 (a) 承認概念の理解

最初にバトラーは、ヘーゲルの承認概念を誤って適用したとするホネットの議論に対し、「あなたが批判するアルチュセールの立場が私に帰属させられていることについては、それは私が実際に持っている立場とまったく同じではない」(Butler [2021a], 42) と述べてホネットの誤読を指摘したうえで<sup>3</sup>、返す刀でホネットの承認概念の理解に疑問を投げかける。バトラーの承認概念の理解にホネットが反対を示した理由として、ホネットは承認を自由を可能にするものと理解しているため、自由を不可能にするようなアイデンティティの制度的帰属に承認が関わってはならないということが挙げられた。そしてこれが理由となる限りで、ホネットの理論における承認は、専ら自由のみに関わり、自由の否定とは関係を持たないことが前提されている。すなわち、ホネットの理論において「否定性は承認から概念的に切り離されたものであり、[...] 否定性はヘーゲル的な社会関係の精緻化にはふさわしくない」(*ibid.*, 50) とされているのである。しかし、バトラーはこの理解とは対照的に、承認の關係に両価的な要素を認める。バトラーは以下のように述べる。

<sup>2</sup> ここでホネットが念頭に置いているのは、『ジェンダー・トラブル』(Butler [1990])におけるバトラーの記述である。「ある一個人や人々の集団の「承認」と、所与の社会秩序のイデオロギイの再生産との間に密接な関係があることを主張することで、『ジェンダー・トラブル』においてあなたは、アルチュセールによるヘーゲルの承認概念の転用を[...]ある程度は踏襲した。[...]あなたの中心的な関心は、二つのジェンダー・アイデンティティのみを標準化＝規準化[normalizing]することを通じて既存のジェンダー秩序を文化的に再生産することであった」(Honneth [2021a], 22)。ホネットによるこの『ジェンダー・トラブル』の読解も、後の議論の争点となる。

<sup>3</sup> バトラー自身、権力によるアイデンティティの認知的帰属を説くアルチュセールの立場には懐疑的である。「認知的帰属は、理解可能性(もしくは価値)を他者に帰属させる既存の主体を前提とする。これは、主体が当然のものとして、その形成や可能性の条件が問われない限りにおいて無批判な立場であると私には思われる」(Butler [2021a], 46)。バトラーがアルチュセールに接近したのは「主体の規制[regulation]を維持し続けることができる心的傾向として、罪悪感がどのように動員されるかに関心を持って」(*ibid.*, 41)いたからであり、認知的帰属という理論を踏襲するためではない。

承認をめぐる闘争は、手に負えない[unmanageable]依存を含む依存の問題と結びついており、[...] 両価性とも結びついている。ヘーゲルでは、生と死を賭けた闘争は、私の生は他者の生と結びついており、私たちの生のための社会的組織は、この乗り越え難い相互依存性を反映し、尊重するものだと理解されなければならないという承認に終わる。そして我々は互いに他者を破壊できもし破壊しもあるのだが、その時には我々は自ら自身をも破壊している。それは、我々自身を破壊の対象とし、相互の破壊行為に我々自身をさらすだけでなく、社会的な生き物として、私たちはある程度、社会的な絆によって定義されているからである。  
(*ibid.*, 44-45)

個々人が他者との相互依存関係によって社会的な存在として定義されており、その関係において他者を破壊することが可能であるならば——すなわち、「私たちが何者であるかは社会的交流の過程で構成される」(*ibid.*, 52) のであり、主体のこのような脱自的側面ゆえに「私たちが初めから、自らの生のために依存し、私たちを破壊し、生かし、支え、そして繁栄するのを助けることができる他者に明け渡されている」(*ibid.*) のであるならば——、この関係の承認にも当然否定的な契機が入り込むことになる。それゆえに、バトラーにとって承認は否定性と概念的に切り離せるようなものではないのである。

またさらに、ホネットが注意を促した承認における二項関係にバトラーは言及し、その中で「承認がそれに参加する人々を変容させるという点で我々は合意できる」(*ibid.*, 42) としつつ、ホネットの承認論の個人主義的な側面を批判する。

あなたが承認を与える行為について記述する仕方を私は高く評価するが、私は、承認は [...] ある主体が他方の主体に対して、あるいは他方の主体のために遂行するものではないと考える。相互承認の構造はじじつ、一連の進行中の関係を通じて形成される「私たち」を前提としている。あなたはこの結論に同意すると思うが、そうであればなぜ私たちは互いに承認を与え合う個人を想像するよう求められるのか、私にはよく分からない。確かに、私たちは相互的な承認がどのようにはたらくかを理解するために一人称から始めることができるが、結局のところ、私たちは私たちの間に成り立つ平等の関係について主張をしているのである。  
(*ibid.*, 47)

「承認者は承認される者に規範的地位——価値——を帰属させ、その関係がいったん相互的なものになるとその過程の直中で両者は変容する」(*ibid.*, 43) というホネットの承認の定式化において、承認者と被承認者という形で主体が前提とされているが、こうした定式化は主体間にすでに成り立っている、より基底的な平等の関係を理論的枠組みからあらかじめ排除している。このような立場は、他者がそもそも主体として見なされていない場合——たとえばある人々が「社会的に死んでおり」、「文明化されておらず」、「未開である」かのように」(*ibid.*) 扱われる場合——、こうした人々を捉えることができなくなる。バトラーによれば「承認が相互的である、あるいは

相互的でありうるという事実そのものが、主体間の構造的平等を前提としている」(*ibid.*) のであり、承認に先立つ主体間のこの平等の関係から、理論を組み立てる必要があるのである。

## 2.2 (b) 承認概念の政治的地位

前項の最後の論点は、政治理論において承認に希望を見出すホネットにバトラーが反対するときの、最も強い議論となる。ホネットによる、規範的地位の付与としての承認のような定式化によって「私たちは、社会的不平等をたとえば不平等な扱いとして理解することができる」(Butler [2021b], 62) が、そうした理解は社会的不平等の全てを捉えることはできないのである。バトラーは次のように述べる。

もしそれらの「他者」が理解可能性の領野に現れないのだとしたら、もしそれらの他者がまったく人格や人間と見なされないのだとしたら、それは歴史的に特定の人間の概念が意味するヒエラルヒーから生じる不平等の結果でありうる。(ibid.)

このように、主体形成の時点で「人間や承認可能な主体の生産においてはたらく不平等の形態」(*ibid.*, 63) があるとすれば、「人間がすでに社会的な領野において理解可能な形で構成されていることを前提とする」(*ibid.*) 議論は、主体形成の次元の不平等を問題にできなくなってしまうだろう。バトラーがホネットのアプローチを批判するのは、まさにこの点においてである。バトラー曰く、ホネットのような「尊厳をもって互いを扱うことを義務付ける倫理に頼ることは、[...] そのような扱いを受けるに値する承認可能な存在として生み出される者とそうでない者がいるという、権力のシステムの差異には対処できない」(*ibid.*, 65)。「問題は、ある人間が規範的地位や尊敬や尊厳をもって扱われる一方で、そうでない人間がいるということだけではない。むしろ問題なのは、人間が差別的＝差別的に[differential] 生産されるということである」(*ibid.*, 62)。

このように、主体を前提とした上でその主体間の不平等な取り扱いを問題とする視点と、主体の生産において働く不平等を問題とする視点には、前者が後者を前提するというような関係があり、前者について語るためには、後者について語らなければならない。この点を踏まえてバトラーは、「私の議論は、あなた[ホネット]が記述するような類の承認が可能であるためには、承認可能性が確立されなければならないということである」(*ibid.*, 63) として、承認と承認可能性の差異を主張するのであり、後者の変革に政治理論の可能性を見出す。すなわち、主体の承認可能性を構成するような規範、言語、メディア、言説、社会的カテゴリー、そして歴史的・経済的条件を批判し、再意味づけすることによって変更していくことが、不平等に対してラディカルに反対するための方策となるのである。



## 結語

本稿では、ホネットとバトラーの論争を手掛かりに、バトラーの承認概念の理解とその政治的地位を明らかにすることを試みた。バトラーにとって、承認概念は以下のようなものである。(a) 承認は両価的なものであり、否定性と概念的に切り離せるものではない。(b) ヘーゲル承認論から引き出すべきは規範的地位の相互付与の理論ではなく、承認の相互性に基づいた平等の理論である。(c) 承認だけでは、社会的不平等を分析しそれに反対するには不十分である。承認可能性という、承認を可能にする諸条件の批判をすることが、不平等に十全に反対するために求められる。

もちろんバトラーは「承認は、正義の理論や民主主義の政治的説明の一部にはなりうる」(Butler [2021b], 68) と認めており、政治理論において承認概念を用いるべきではないと主張しているわけではない。さらに言えば、たとえば無国籍者やホームレスなどの抵抗運動に対してバトラーは、「彼ら／彼女らの抵抗は、主体としての地位を確立するものであり、これまでの扱われ方が否定的であったことに対抗するものである。彼ら／彼女らは承認を求めて闘っているが、同時に、承認が可能になるような条件の変更を求めて闘っているのだ」(Butler [2021a], 48) と分析しており、ある運動が承認と承認可能性の双方の変更を同時に求めうることを認めている。こうした事例においては、承認と承認可能性の間の関係について、なお不明瞭さが残る。両者がどのような関係にあるのかを探求することは、今後の課題としたい。

(はまもと りょうすけ 哲学哲学史・博士前期課程)

## 参考文献

- Butler, Judith., (1990), *Gender Trouble: Feminism and Subversion of Identity*, New York: Routledge.
- Butler, Judith., (2021a), "Recognition and the Social Bond: A Response to Axel Honneth", in Ikäheimo, Heikki., Lepold, Kristina., and Stahl, Titus. (eds), *Recognition and Ambivalence*, New York: Columbia University Press., pp.31-54.
- Butler, Judith., (2021b), "Recognition and Mediation: A Second Reply to Axel Honneth", in Ikäheimo, Heikki., Lepold, Kristina., and Stahl, Titus. (eds), *Recognition and Ambivalence*, New York: Columbia University Press., pp.61-68.
- Honneth, Axel., (2021a), "Recognition Between Power and Normativity: A Hegelian Critique of Judith Butler", in Ikäheimo, Heikki., Lepold, Kristina., and Stahl, Titus.(eds), *Recognition and Ambivalence*, New York: Columbia University Press., pp.21-30.
- Honneth, Axel., (2021b), "Intelligibility and Authority in Recognition: A Reply", in Ikäheimo, Heikki., Lepold, Kristina., and Stahl, Titus. (eds), *Recognition and Ambivalence*, New York: Columbia University Press., pp.55-60.
- Ikäheimo, Heikki., Lepold, Kristina., and Stahl, Titus., (2021), *Recognition and Ambivalence*, New York: Columbia University Press.